

大江山

楠山正雄

青空文庫

一

むかし源頼光みなもとのかげみつという大將たいしょうがありました。その家来けらいに渡辺綱わたなべのつな、卜部季武うらべのすえたけ、碓井貞光うすいのさだみつ、坂田公時さかたのきんときという四人にんつよの強い武士ぶしがいました。これが名高なだかい、

「頼光らいこうの四天王てんのう」でございます。

そのころ丹波たんばの大江山おおえやまに、酒吞童子しゅてんどうじと呼ばれた恐ろしい鬼おにが住すんでいて、毎日まいにちのように都みやこの町まちへ出て来ては、方々ほうぼうの家の子供こどもをさらって行きました。そしてさんざん自分ぶんのそばそばにおいて使つかつて、用ようがなくなると食たべてしまいました。

するとある時とき、池田中納言いけだのちゅうなごんという人ひとの一人きりのお姫ひめさまが急きゆうに見えなくなりました。中納言ちゅうなごんも奥方おくがたもびつくりして、死ぬほど悲かなしがって、上手じょうずな占うらない者にたのんで

みてもらいますと、やはり大江山おおえやまの鬼おにに取とられたということがわかりました。

中納言ちゅうなごんはさつそく天子てんしさまの御所ごしよへ上あがって、大事な娘むすめが大江山おおえやまの鬼おにに取とられたことをくわしく申もうし上げて、どうぞ一日いちにちもはやく鬼おにを退治たいじして、世間せけんの親おやたちの難儀なんぎをお救すくい下さるようにとお願いねがい申もうし上げました。

天子さまはたいそう氣の毒に思し召して、

「だれか武士のうちに大江山の鬼を退治するものはないか。」

と大臣におたずねになりました。すると大臣は、

「それは源氏の大将頼光と、それについております四天王の侍どもにかぎりま

。

と申し上げました。天子さまは、

「なるほど頼光ならば、必ず大江山の鬼を退治して来るに相違ない。」

とおっしゃって、頼光をお呼び出しになりました。

頼光は天子さまのいいつけを伺いますと、すぐかしこまうてうちへ歸りましたが、

なにしろ相手は人間と違って、変化自在な鬼のことですから、大ぜい武士を連れて行つ

て、力ずくで勝とうとしても、鬼にうまく逃げられてしまつてはそれまでです。なんでも

これは人数は少なくともよりぬきの強い武士ばかりで出かけて行つて、力ずくよりは智

恵で勝つ工夫をしなければなりません。こう思つたので、頼光は家来の四天王の外に

は、一ばん仲のいい友達の平井保昌だけをつれて行くことにしました。世間ではこ

の保昌のことを四天王に並べて、一人武者といっていました。

それからこれは人間の力だけには及ばない、神様のお力をもお借りしなければなら
ないといので、頼光と保昌は男山の八幡宮に、綱と公時は住吉の明
神に、貞光と季武は熊野の権現におまいりをして、めでたい武運を祈りました。
さていよいよ大江山へ向けて立つことにきめると、頼光はじめ六人の武士はいずれ
も山伏の姿になって、頭に兜巾をかぶり、篠掛を着ました。そして鎧や兜は笈の中に
かくして、背中に背負って、片手に金剛杖をつき、片手に珠数をもって、脚絆の上に
草鞋をはき、だれの目にも山の中を修行して歩く山伏としか見えないような姿にい
でたちました。

二

六人の武士はいくつとなくけわしい山を越えて大江山のふもとに着きました。たまた
まきこりに会えば道を聞き聞き、鬼の岩屋のあるという千丈ガ岳を二すじに目ざして、
谷をわたり、峰を伝わって、奥へ奥へとたどって行きました。

だんだん深く入って行つて、まっくらな林の中の、岩ばかりのでこぼこした道をよじて

行きますと、やがて大きな岩室いわむろのまえ前に出ました。その中に小さな小屋こやをつくつて、三人のおじいさんが住すんでいました。頼光らいこうはこんな山奥やまおくで不思議ふしぎだと思おもつて、これも鬼おにの化ばけたのではないかと油断ゆだんのない目で見みていますと、おじいさんたちはその様子ようすを覺さとつたとみえて、にこにこしながら、ていねいに頭あたまを下さげて、

「わたくしどもは決けつして変化へんげでも、鬼おにの化ばけたのでもありません。一人は摂津せつの国くにから、ひとりひとりは紀伊きいの国くにから、一人は京都きょうとに近い山城やましろの国くにから来きたものです。あの山の奥おくに住すむ酒吞童子しゅてんどうじのために妻つまや子こを取とられて残念ざんねんでたまりません。どうかして敵かたきを取りたいと思おもつて、ここまで上のぼつては来きましたが、わたくしどもの力ちからではどうすることもできません。山伏やまぶしの姿すがたにやつしてはおいになりませんが、あなた方がたはきつと酒吞童子しゅてんどうじを退治たいじするために、京都きょうとからお下くだりになつた方々かたがたでしょう。さあ、これからわたくしどもがこの山の御案内ごあんないをいたしますから、どうぞあの鬼おにを退治たいじして、わたくしどもの敵かたきをいっしよに討うつていただきとうございます。」

といいました。

頼光らいこうはそれを聞きいてやつと安心あんしんしました。そしてしばらく小屋こやの中なかに入はいつて足の疲つか

れをやすめました。その時三人のおじいさんは、

「あの鬼おにはたいそうお酒さけが好きで、名前なまえまで酒吞童子しゅてんどうじといっております。好物こうぶつのお酒さけ

を飲んで、酔よい倒たおれますと、もう体が利きかなくなつて、化ばけることも、にげることもでき

なくなります。わたくしどものこのお酒さけは、「神かみの方ほう便鬼べんおにの毒酒どくさけ」という不思議ふしぎなお

酒さけで、人間にんげんが飲めば体からだが軽かるくなつて力がましますが、鬼おにが飲めば体からだがしびれて、通力つうりき

がなくなつてしまつて、切きられても、つかれても、どうすることもできません。このお酒さけ

をあげますから、酒吞童子しゅてんどうじにすすめて酔よいつぶした上、首尾しゅびよく鬼おにの首くびを切きつて下ください

。」

といつて、お酒さけのかめをわたししました。

それから三人にんのおじいさんは先さきに立たつて、千丈せんじょう丈岳たけの上のぼつて行きました。十丈じじょうくら

い長ながさのある、まつくらな岩穴いわあなの中なをくぐつて外へ出ますと、さあさあと音おとを立てて、

小さな谷川たにがわの流ながれている所へ出ました。その時おじいさんたちはふり向むいて、

「ではこの川についてどんどん上のぼつておいでなさい。すると川のふちに十七八むすめの娘むすめがいま

すから、その子にたずねて、鬼おにの岩屋いわやへおいでなさい。」

といったと思うと、三人にんともふいと姿すがたが見えなくなりました。

みんなはあの三人のおじいさんは、住吉の明神さまと、熊野の権現さまと、男
山の八幡さまが仮に姿をお現しになったものであることをはじめて知って、不思議
に思いながら、後ろから手を合わせておがみました。そしてこの通り神さまのあらたかな
加護のある上は、もう鬼を退治したのも同然だと心強く思いました。

そこで教わったとおり川についてどこまでも上って行きますと、十七八のきれいな娘が、
川のふちで血のついた着物を洗いながら、しくしく泣いていました。

頼光はそのそばへ寄って、

「あなたはだれです。どうしてこんな山の中に一人でいるのです。」

と聞きました。娘はまたぼろぼろと涙をこぼしながら、

「わたくしは都から、ある晩鬼にさらわれてこの山の中に来たのでございます。おとうさ
まやおかあさまや、ばあやたちはどうしているでしょう。その人たちにも二度と会うこと
もできない身の上になりました。」

といいました。そして、

「あなた方はいつたいどうしてこんなところへいらしたのです。ここは鬼の岩屋で、こ
れまでよそから人間の来たことはありません。」

といいました。頼光は、そこで、

「いや、わたしたちは天子さまのいいつけで、鬼を退治に来たのだから、安心しておいでなさい。」

といいきかれますと、娘はたいそうこんで、

「それではこの川をまたずんずん上つておいでになりますと、鉄の門があつて、門の両脇に黒鬼と赤鬼が番をしています。門の中にはるりの御殿があつて、その庭には春と夏と秋と冬の景色がいつぱいにつくつてあります。しゅてんどうじはその御殿の中で、夜昼お酒を飲んで、わたくしどもに歌を歌つたり、踊りを踊らせたり、手足をさすらせたりして、あきるとつかまえて、むごたらしく生き血を吸つて、骨と皮ばかりにして捨ててしまいます。このとおり今日も、ころされたお友達の血のついた着物をこうして洗っているのです。」

といいました。

頼光は娘を慰めて、教えられたとおり行きますと、なるほど大きないかめしい鉄の門が向こうに見えて、黒鬼と赤鬼が番をしていました。門に近くなると頼光たちは、わざとくたびれきつたように足をひきずつてあるきながら、こちらから鬼に声をかけて、

「もしもし、旅たびの者ものでございますが、山道やまみちに迷まよつて、もう疲つかれて一足も歩あるかれません。どうぞお情なさけに、しばらくわたくしどもを休やすませていただきとうございます。」

と、さも心こころ細ほそそうにいいました。

鬼おにどもは、

「これは珍めづらしい者ものがやつて来たぞ。なにしろ大王様だいおうさまに申し上げよう。」

といつて、酒吞童子しゅてんどうじの所ところへ行いつてしらせますと、

「それはおもしろい。すぐ奥おくへとおせ。」

といいました。

六人にんの武士ぶしが縁側えんがわに上あがつて待まっていますと、やがて雷かみなりや稲いな光びかりがしきりに起おこつて、大風おおかぜのうなるような音おとがしはじめました。すると間まもなくそこへ、一丈じようにもあまろうという大きな赤鬼あかおにが、髪かみの毛けを逆さか立てて、お皿さくらのような目をぎよろぎよろさせながら出て来きました。その姿すがたを一目ひとめ見ただけで、だれだつておどろいて氣きを失うわずにはいられませんでした。けれども頼光らいこうはじめ六人にんの武士ぶしはびくともしないで、酒吞童子しゅてんどうじの顔かおをじつと見み返かえして、ていねいにあいさつをしました。童子どうじはその時ときおうへいな調子ちようしで、

「きさまたちはいったいどこから来たき。よくこんな山奥やまおくまで上あがつて来たものだな。」

といいました。

すると頼光が、

「それはわたくしども山伏のならいで、道のない山奥までも踏み分けて修行をいたします。わたくしどもはいつたい出羽の羽黒山から出ました山伏でございですが、この間は^{あいだ}大和の^{やまと}大峰^{おおみね}におこもりをしまして、それから都へ出ようとする途中道に迷つて、このとおりこちらの御厄介になることになりました。」

といいました。酒呑童子はそう聞いて、すっかり安心しました。

「それは^き気の^{どく}毒なことだ。まあ、ゆつくり休んで、酒でも飲んで行くがいい。」

こういうと頼光も、

「それはごちそうです。失礼ではございますが、わたくしどももちょうど酒を持つてまいりましたから、この方も飲んで頂きたいものです。」

といいました。

「それはありがたい。それでは酒盛りをはじめようか。」

^{どうじ}童子はこういつて、^{おお}大ぜいの^{こしもと}腰元や^{けらい}家来にいつけて、^{さけ}酒さかなを^{はこ}運ばせました。酒呑^{ゆてんどうじ}童子はそれでもまだ油断なく、^{にん}六人の^{やまぶし}山伏を^{ため}試してみるつもりで、

「それではまず客^{きやくじん}人^{ひと}たちに、わたしの勧め^{すす}める酒^{さけ}を飲^のんでもらって、それからこんどはわたしがごちそうになることにしよう。」

といって、酒^{しゅてんどうじ}呑^お童子^{さかずき}は大きな杯^おになみなみ人^{にんげん}間の生^いき血^ちを絞^{しほ}って入れて、

「さあ、この酒^{さけ}を飲^のめ。」

といって、頼^{らいこう}光^{こう}にさしました。頼^{らいこう}光^{こう}は困^{こま}った顔^{かお}もしないで、一^{ひと}息^{いき}に飲^のみほしてし

まいしました。それから保^{ほうしょう}昌^{つぎ}、次^{つぎ}は綱^{つな}と、かわるがわる次^{つぎ}から次^{つぎ}へ杯^{さかずき}をまわして、おし

まいに酒^{しゅてんどうじ}呑^{かえ}童子^こに返^{かえ}しました。

「酒^{さけ}ばかりではさびしい。さかなも食^くえ。」

酒^{しゅてんどうじ}呑^な童子^なはこういつて、こんどは生^なま生^なましい人^{にんげん}間の肉^{にく}を出^だしました。頼^{らいこう}光^{こう}たち

はその肉^{にく}を切^きって、さもうまそうに舌^{したつづみ}鼓^{つづみ}をうちながら食^たべました。酒^{しゅてんどうじ}呑^{らいこ}童子^こは頼^{らいこ}

光^うたちが悪^{わる}びれもしないで、生^いき血^ちのお酒^{さけ}でも、生^なま肉^{にく}のおさかなでも、引^ひき受^うけてく

れたので、見^みるから上^{じょう}機^き嫌^{けん}になつて、

「こんどはお前^{まえ}たちの持^もって来^きた酒^{さけ}のごちそうになろうじやないか。」

といいました。頼^{らいこう}光^{こう}はさつそく綱^{つな}にいつけて、さつき神^{かみ}様^{さま}から頂^{いた}いた「神^{かみ}の方^{ほう}

便^{んおに}鬼^{どくさけ}の毒^{どく}酒^{さけ}」を出^だして、酒^{しゅてんどうじ}呑^お童子^{さかずき}の大^お杯^{さかずき}になみなみとつぎました。酒^{しゅてんどうじ}呑^こ童子^こ

は一息に飲みほして、これもさもうまそうに舌鼓をうちながら、

「これはうまい酒だ。もう一ぱいくれ。」

と杯を出しました。頼光は心の中ではしめたと思いながら、うわべは何気ない顔をし

て、

「どうもお口になつて満足です。それではお酒だけではおさびしいでしょうから、こんどはおさかなをいたしましょう。」

といつて、立ち上がつて、扇をつかいながら舞いを舞いました。四天王は声を合わせ拍子を取りながら、節おもしろく歌を歌いました。

それを見ると、酒呑童子も、手下の鬼たちも、おもしろそうに笑いながら、すすめられるままに、「神の方、便鬼の毒酒」をぐいぐい引き受けて、いくらでも飲みました。

そのうちにだんだんお酒のききめが現れてきて、酒呑童子はじめ鬼どもは、みんなごろごろ酔い倒れて、正体がなくなつてしまいました。

頼光たちは鬼のすっかり倒れたところを見ますと、笈の中から鎧や兜を出して、しつかり着こみました。そして六人一度に刀をぬいて、酒呑童子の寝ている座敷にとびこみますと、酒呑童子はまるで手足を四方から鉄の鎖でかたくつながれているように、

いくじなく寝込んでいました。頼光はすぐ刀をふり上げて酒吞童子の大きな首をごろりと打ち落としてしまいました。酒吞童子の手足はそのまま動けなくなりましたが、切られた首だけは目をさまして、すつと空に飛び上がりました。そしていきなり頼光をめぐがてかみついて来ようとしていました。けれども兜の前立のきらきらする星の光におじけて、ただ口から火を吹くばかりで、そばへ近寄ることができません。そのうち頼光に二三度つづけて切りつけられて、首はどんと下におちてしまいました。

手下の鬼どもは、しばらくの間はてんでんに鉄棒をふるって、打ちかかってくるが、六人の武士に片端から切り立てられて、みんな殺されてしまいました。

鬼が大ぜいつかまえておいた娘たちの中には、池田の中納言のお姫さまも交じっていました。頼光は鬼のかすめた宝物物といっしよに娘たちをつれて、めでたく都へ帰りました。天子さまはたいそうよろこびになって、頼光はじめ保昌や四天王たちにたくさん御褒美を下さいました。そしてそれからは鬼が出て人をさらう心配がなくなりましたから、京都の人たちはたいそうよろこんで、いつまでも頼光や四天王たちの手柄を語り伝えました。

青空文庫情報

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

※「千丈《せんじょう》ガ岳《たけ》」の「ガ」は底本では小書き。

入力：鈴木厚司

校正：太久保ゆう

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大江山

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>